



華・鄧両氏の力関係は今後の中国政治にどう反映するか
(三中全会の席上で。右端は葉剣英副主席) =WWP

鄧小平復活の大いなる矛盾

次のステップは何か

中 嶋 嶺 雄

免罪された毛沢東と華国鋒の責任

機不可失
時不再来

「機 失うべからず。時 再び来らず」
これは鄧小平がよく愛好する対句である。いかにも鄧小平好みの言葉だといえよう。激動の政治社会を生きぬき、毛沢東以後の中国への捨て石となって昨春の天安門事件で失墜していった鄧小平は、内外の注視のなかで、ついに再復活を遂げた。捨て石どころかカナメとして生きてきたのである。

七月二日夜に発表された中国共産党一〇期三中全会のコミニケによると、三中全会（七月一六～二一日）は、鄧小

平のすべての職務の回復と「四人組」の党籍・職務の剝奪を全会一致で決定したという。同時に、華国鋒の党主席兼中央軍事委主席就任をはじめ中央委員会レベルで追認したのであった。

このような一連の重要措置を一挙に成就し、近くに予定されている第一回党大会の議事日程も公示されたことによつて、毛沢東以後の中国内政はここに安定化し、華国鋒体制は著しく強化されるのであろうか。

だが、それにしては、今回の鄧小平再復活にいたる過去数カ月の中国内政のブロセスはあまりにも曲折の多い不透明な状況にあったし、そもそも三中全会にか

んする公式文獻つまりコミュニケそれ自身があまりにも理不尽でありすぎる。私は、中国共産党の近來の公式文獻のなかで、今回のコミュニケほど不整合な文獻を見たことがない。それは毛死後の北京政変という異常事態を乗りきったあとの政治的興奮と中国の政治文化に固有な表現の誇張という特殊性を考慮してもなお残る問題点である。

コミュニケは、「四人組」粉砕によって「わが国は大分裂、大後退を免れ、革命は救われ、党は救われた」と述べ、「彼らは、われわれのプロレタリア階級独裁をブルジョア・ファッショ独裁に変え、社会主義の中国を再び半植民地・半封建の国に転落させようとたくらんだ。……彼らの社会的基盤は地主、富農、反革命分子、悪質分子、新旧ブルジョア階級である」として「四人組」のそれぞれに「新しく現れたブルジョア分子」（王洪文）、「国民党特務」（張春橋）、「裏切り者」（江青）、「階級異分子」（姚文元）というレッテルをはっている。

こうして、すでに粉砕されたはずの「四人組」糾弾のヒステリックな高まりのなかで、鄧小平再復活という政治的にはきわめて重大な意味をもつ措置が講じられたのであったが、今回のコミュニケは「毛主席の提案に基づいて」全会一致で決定したはずの昨年四月七日の鄧小平追放にかんする党中央の決議との関係を放置したまま、「四人組」という「黒い一味」の均衡上、鄧小平が再復活するのは当然

だという実感に甘えて、毛沢東主席および今日の華国鋒主席を含む党中央の責任を恣意的に免罪するように処理したのであった。

しかも、北京政変後の華国鋒指導部は、あれほど重大な政治的变化があったにもかかわらず、今日まで中央委員会さえ開けず、自己の体制の制度的・組織的な認知を得る場を欠いていたのであったが、今回、いわば鄧小平再復活という「危険な代償」と引きかえに、はじめてその認知を得たのである。コミュニケは、総会が、「一九七六年一〇月七日に採択した華国鋒同志の党中央委主席、党中央軍事委主席就任についての決議を全面的に支持した」と語っているが、一〇月七日という日が北京政変当日であったことを思えば、華国鋒指導部は「四人組」の一網打尽という異常手段によって、まさに「政権は銃口から生まれる」ように、その日に権力を手中にした強権的指導部であることは歴然としており、たとすれば、あの「食うか食われるかの階級闘争」において、もしも事態が逆転していれば、今日の中国はコミュニケがいうように、「ブルジョア・ファッショ独裁の国」、「半植民地・半封建の国」になっていたのだろうか、という単純明快な疑問を多くの中国民衆は抱くであろう。

しかも、今回のコミュニケでは、「四人組」打倒は「毛沢東思想の偉大な勝利」であり、毛主席のプロレタリア革命路線の偉大な勝利である」という。かくして

文化大革命の奪権闘争に軍が全面介入したかゆえに、その「兵營國家」体制下において林彪の台頭を許した九全大会を否定し、「若中・青」の革命的三結合を鼓吹し、文化大革命の「新生事物」の体現といわれた王洪文の台頭で印象づけられる十全大会を否定したうえに、いずれも文化大革命の中心的担い手であった「四人組」を打倒してしまったの今日の今日なお文化大革命の勝利を空しく語り、革命の継続を語らねばならないという理不尽がたちどころにあらわれてこざるを得ない。

過去一〇年間のこれら一連の重大かつ明白な誤りに毛沢東も党中央もまったく

疑問点の多い「華・鄧体制確立」説

では、中国が当面する根本的な政治的矛盾とはなにか。それはいわば非毛沢東化への今日の過渡期の矛盾だといえようが、まず第一には、毛沢東路線をかかげながら実質的には毛沢東路線から離脱しつつある今日の中国社会の発展方向に規定される矛盾である。この矛盾は、一九七五年夏の杭州事件（杭州各工場での労働者の賃上げ要求に端を発したストライキ事件）以来、社会の表面にもあらわれていたが、「社会主義社会での階級闘争」を絶対化し、「貧困のユートピア」

を社会進歩の道標とする毛沢東路線が中国社会の現実の諸要求と合致せず、実際には中国社会の発展を阻害しつつあったのである。

無関係であって、ただひたすら「四人組」という「陰謀集団」にすべてが動かされてきたかのような総括は、当然のことながら、それほどの「陰謀集団」を内部にかかえながら、なぜ毛沢東の死を待ってしか彼らを打倒できなかったのか、という根本的な疑問に逢着するであろう。しかも、今回の三中全会は華国鋒主席のイニシアチブでおこなわれたことを意識的に強調し、同時に華国鋒主席への英雄崇拜を高めつつあるのであるが、結局は、「毛沢東主席の生前の指示」というお墨付きにすべてがなされているのであって、そのこと自体が、中国の当面する根本的な政治的矛盾の反映だといわねばなるまい。

この深刻な矛盾に気づいていた指導者こそ周恩来であり、鄧小平であったといわねばならない。鄧小平が中心になって、その年（七五年）秋に策定し、毛沢東以後の中国の方向を規定しようとした三つの綱領的文書（いわゆる「総綱論」「工業二十条」「科学院大綱」）は、このプログラムがもつ根本的かつ挑戦的な意

義のゆえに、「走資派」批判（鄧小平批判）の段階では「三株毒草」として激しく非難されたのであった。

だが、今日、これらの綱領は、当面の中国社会の発展に不可欠なるがゆえに再び脚光を浴びて現実の諸政策のなかにはやくも生かされつつあり、この点で中国は理論的・政策的にはもはや完全に鄧小平路線を歩みはじめたのである。このことは去る四・五月の「工業は大慶に学ぶ全国会議」にも歴然としており、またたとえば最近頻出する向群署名の論文「反復活の旗印をかかげて復活をおこなう——『四人組』の『総綱論』にたいする批判を批判する」（『人民日報』七月八日）などにおいても明白であった。

この点で華国鋒指導部は政策的には鄧小平路線を採用せざるを得ず、そのような潮流の高まりのなかで政治的には鄧小平再復活へと妥協せざるを得なかったと思われる。手続き上、華国鋒主席の発言（本年三月の中央工作会议での発言）による鄧小平の「自己批判」（？）（華主席、葉劍英副主席、党中央への二通の手紙）という形式をとることで、かろうじて華国鋒指導部の「面子」は保られたのである。こうして、鄧小平再復活は、今日の中国がもつ本質的な矛盾のただなかにおいて実現したのであった。

第二には、このような本質的な矛盾のもつ通俗的側面であるが、「四人組」を妖怪変化のように嘲笑し、蛇蝎のように憎悪し、とくに江青夫人をあたかも中世

の魔女狩りのように諸悪の根源として集的に論難・罵倒しながら、依然としてその夫・毛沢東主席を無条件でたえねばならないことの矛盾であり、この矛盾は、その通俗性のゆえに無視し得ない大衆的な意味をもっている。

そのような「裏切り者」を最愛の妻として、また文化大革命の危機を乗り切るスベードの女王として許容した毛沢東その人を「われわれの偉大な指導者・教師」としていただくことの矛盾は、「あなたかやれば私は安心だ」（你办事我放心）という昨年四月三〇日の毛沢東指示を唯一の護身符として自己の正統性を誇示しつつ、新しい英雄崇拜を鼓吹しつつある華国鋒その人のもつ「前近代性」と無関係ではないであろう。この点でも、かつて個人崇拜を大いに批判した鄧小平の再復活は、華国鋒指導部にとって本来、歓迎されざるものであったといえよう。

一部には華・鄧体制の確立とか、華と鄧が車の両輪になるとか、毛沢東死後のときと同様に、またもや集団指導体制の実現といった観測が出はじめているが、こうした見方は、今日の中国が当面する根本的な政治的矛盾と深部の潮流、そして中国の政治文化の特質をほとんど理解し得ていないものだといわねばならない。

そして、この点は、北京政変そのものがまさに「食うか食われるかの闘争」の帰結であって、決して中国内政の悪癖

の魔女狩りのように諸悪の根源として集的に論難・罵倒しながら、依然としてその夫・毛沢東主席を無条件でたえねばならないことの矛盾であり、この矛盾は、その通俗性のゆえに無視し得ない大衆的な意味をもっている。

そのような「裏切り者」を最愛の妻として、また文化大革命の危機を乗り切るスベードの女王として許容した毛沢東その人を「われわれの偉大な指導者・教師」としていただくことの矛盾は、「あなたかやれば私は安心だ」（你办事我放心）という昨年四月三〇日の毛沢東指示を唯一の護身符として自己の正統性を誇示しつつ、新しい英雄崇拜を鼓吹しつつある華国鋒その人のもつ「前近代性」と無関係ではないであろう。この点でも、かつて個人崇拜を大いに批判した鄧小平の再復活は、華国鋒指導部にとって本来、歓迎されざるものであったといえよう。

一部には華・鄧体制の確立とか、華と鄧が車の両輪になるとか、毛沢東死後のときと同様に、またもや集団指導体制の実現といった観測が出はじめているが、こうした見方は、今日の中国が当面する根本的な政治的矛盾と深部の潮流、そして中国の政治文化の特質をほとんど理解し得ていないものだといわねばならない。

環を本質的に断ち切ったものでないことを示唆している。昨年二月の「走資派」批判（鄧小平批判）と華国鋒の台頭（総理代行）、四月の鄧小平追放と華国鋒の再台頭（総理兼第一副主席）といった鄧と華の正反対の出会いを思い起こし、また「走資派」批判と教育革命の高揚のなかで華国鋒自身、たとえば昨年二月二五日に「毛主席の革命路線を抛棄し、『四つの現代化』なるものをもちあげ、毛主席みずから発動したプロレタリア階級独裁理論学習運動をあくどく攻撃し

た」として鄧小平の「三つの指示をカナメとする」や「唯生産力論」を激しく非難している事実（華国鋒「右傾翻案風と鄧小平批判問題についての講話」などを思えば、「四人組」批判という点では一致し得る華国鋒ら文革派非上海グループと鄧小平ら旧実権派）「走資派」勢力との亀裂は決して浅くないことがわかるであろう。

今回の三中全会は、これらの根本的な政治的矛盾への対応をすべて回避したところになり立っていったように思われる。

た）として鄧小平の「三つの指示をカナメとする」や「唯生産力論」を激しく非難している事実（華国鋒「右傾翻案風と鄧小平批判問題についての講話」などを思えば、「四人組」批判という点では一致し得る華国鋒ら文革派非上海グループと鄧小平ら旧実権派）「走資派」勢力との亀裂は決して浅くないことがわかるであろう。

それでは復活した鄧小平は、いわゆる華国鋒体制のもとでどのような役割を演ずるのであるか。私には四川（客）家として生まれ育ち、長い革命経歴と類稀な個性をもつ鄧小平が、このまま次の政治的ステップを刻まずに生涯を遂げるとは思われぬ。むしろ自己の政治的地位にもはやこだわらなくてもいい鄧小平であればこそ、その余生を奔放かつ大胆な政治の実践に賭けるのではなからうか。

たちが彼にかんじていだいている不安であるのかもしれない。しかし、そうであるだけに、鄧小平再復活の意味するところはきわめて深遠である。そして鄧小平はたんに不死身の政治家として劇的な再復活を遂げたのではなく、まさに毛沢東以後の中国において志向しようとしていた彼自身の路線が定着しつつあるなかで再び第一線に復帰したのである。いいかえれば、彼は「最後まで悔い改めない走資派」として今日、劇的に復権したのであり、まぎれもない旧実権派、反文革路線、非毛沢東路線の立場において復活したのだといえよう。このような鄧小平は、一九五八年の

対ソ関係の理性的再認識の可能性も

「大躍進」政策以来、「社会主義社会での階級闘争」という観念にとりつかれて中国の社会主義建設を動揺させた「専」よりも「紅」の政治優先の路線、つまり文化大革命において極限的に増幅した毛沢東路線そのものへの有力な「異議申し立て者」なのであった。そして彼はその「異議申し立て」をいささかも引っこめていないばかりか、たとえ上海の実権派N O 1といわれた陳丕頭の最近の復活にみられるように、党・政・軍を貫ねて旧実権派が大躍進に復権しつつある状況のなかで、鄧小平はその象徴的な表現として再復活したのである。

このように見たとき、彼こそは、中国社会現代化のために、そして、今日の中

国が当面する政治的矛盾を切開するため、おそらく中国に特有の功罪二元論的発想に依拠して毛沢東神話を打ちくたせ「大躍進」政策や文化大革命をとして「四人組」の重用は毛沢東政治の誤った部分であるといひ得る人物なのである。この点では鄧小平がかつて一九五六年のソ連共産党第二〇回大会に出席して非スターリン化の洗礼を受けた古参幹部であり、八大大会では「毛沢東思想」という言葉を党の公式文獻から削除した合理主義者であることを忘れてはなるまい。つまり今日の中国において、いかなるかたちであるにせよ「毛沢東批判」を敢行し得る唯一の人物こそ鄧小平その人なのである。

次号は夏の合併特大号

読者の応募原稿 掲載作発表

私にとっての「ふるさと」

応募原稿八五五編の中から、現代のふるさと像をつきつめた問題作一三編を選び紹介します。また、永六輔・富岡多恵子・丸山健二の三氏による座談会で、ふるさと喪失の状況を分析します。

激化する新兵器開発競争

発売 280円
増 16
8月5日

朝日ジャーナル編集部

こうした内政的条件はいうまでもなく中国の対外政策を規定する。とくに鄧小平の存在が目されるのは、彼こそは、毛・周なき今日の中国において、内政の条件に左右されながら立案される対外政策が、政策決定者の人格や感受性によって淘汰されるという内政と外交のダイナミックスを体現し得る唯一の人物であることであろう。

この場合、内政の基調が経済重視、「紅」よりも「専」の「四つの現代化」路線に傾き、「洋奴哲学」への一面的批判がなくなるとすれば、ソ連を主敵とするかぎりにおいて、当然、アメリカや日本など西側諸国との連携がすすむだろうと見るのが一般的であろう。アジアの新しい国際秩序を米・日・中の「太平洋横断的連携」に求めるアメリカの最近の著しい傾向とも、この点は合致する。それだけに、当初はきわめて事務的なものと思われていたこの八月下旬のパンスマ國務長官訪中も改めて注目されねばならないが、しかし米中間には国交樹立という将来の可能性が残されているとはいえず、現状のままでの無限定な米中接近がソ連からのさらに大きな脅威を招かざるを得ないことを考えたとき、米中関係にはおのずと限界があるように思われる。

しかも国内的な「左」からの批判や外からは最近のアルバニアのような国際的左翼からの対中批判にも出合うというような状況のなかで、結局、対米接近の選択の幅は限定されざるを得なくなるであ

ろう。そのようなとき中ソ関係が当然再検討されるであろうし、その場合に重要な意味をもつのが、鄧小平らの実権派レベルの世界認識ではなからうか。

私がかつて本誌で詳述したように（拙稿「中ソ和解のカギ握る鄧小平復活問題」本誌一九七七年二月四日号参照）鄧小平再復活後の中国には実権派レベルの世界認識が再現する可能性に注目せねばならず、対ソ関係にしても、毛沢東に代表される対ソ憎悪一点ばりの感性的認識から、実権派的なより冷静な理性的認識へ、従って、より政策的・選択的な中ソ関係の形成へと動く可能性が出てきたこととなる。非毛沢東化された中国がソ連と和解する可能性はさらに大きいであろう。

こうしていま、クレムリンは、鄧小平再復活後の中国内政の推移を新たな注目と関心をもって、しかも細心の注意をはらいつついささか遠慮がちに、いささか自信ありげに見守ろうとしている。

中ソ関係の一定の変化をテコにして、実権派レベルにおける国際共産主義運動の復原力、すなわち、モスクワ―北京―平壤―ハノイ―日共といったアジアの共産主義運動の一定の連携の可能性を見通しておくことも、いまや決して突飛な展望ではないであろう。最近のアルバニアの対中離反が物語るように、国際関係や国際共産主義運動に絶対不変の法則は存在しないのである。

（左かじま ふねお・東京外国語大学教授）

報道
解説
評論

朝日ジャーナル

1977
Vol.19
No.32 220P
8・5

建軍50年—素顔の中国人民解放軍 特集 失われる海 海洋大国日本の行くえ 首長竜は存在するか

よみがえる古代の南太平洋〈対談〉 近森 正／高山 純

演歌—現代に抗う日本のこころ

〈座談会／インタビュー〉 岩城宏之／砂原美智子／寺山修司／森 敦
立花隆のロッキード裁判傍聴記

五十二年八月五日発行 昭和五十四年三月四日国鉄発局特別後援雑誌四三三号